

# 最優秀賞

神奈川新聞社長賞

気付くこと、寄り添うこと

横浜市立飯島小学校

六年 橘 新太

福祉について考えようと思った時、ぼくは五月に祖母が入院した時の家族の出来事を思い出した。

いつも元気で活動的な祖母が大動脈解離という病気になり手術をし一ヶ月半入院した。突然大きな病気になり、病気になつた祖母が一番大変で辛いのだとぼくは思つていた。

ぼくは週末しかお見舞に行けなかつたけど母は仕事があつても毎日病院に行き、家のこともやつて、ぼくの習い事の送り迎えもしてとても忙しそうにしていた。

ある夜、父と話している母が大きな声で泣き出してしまつた。母が泣いてしまつた理由は、沢山のことを母一人が背負つてしまつてゐる状態で苦しくなつてしまつたということ。母が

泣いてしまってまで父もぼくも母の大変さを感じてはいたけれど、「大丈夫だよ」という母を見ているだけだった。そこから父とぼくは自分で出来ることは積極的にやるようにして、母は祖母の退院まで仕事を休んだ。

病気をすると、病気になつた本人はもちろん、周りの家族の生活も一変してしまう。病気の人を支える人が辛くなつてしまわないように小さなことでも何かに気付き一緒に寄り添うことの大切なんだと、ぼくは身をもつて知つた。

無事退院した祖母は今リハビリを頑張つていて、母はいつもの騒がしい母に戻つた。

ぼくの考える福祉は、社会全体で考えるとともに小さなことかもしれない。でも身近な人の変化に気付き寄り添うことが一人でも多く出来るようになれば、また他の誰かに手を差し伸べることが出来るのではないかと思う。

自分らしさを失わないように、困った顔や泣き顔がまた一つ笑顔に戻れたなら、それを繋げることでより優しい社会になつてほしいとぼくは願う。